

# 改訂の序

本書の初版は10年程前に発刊されました。初版の序に『ICUに関する専門書自体が非常に少なく、読みやすいICU本、面白いICU本、若手医師が「食いつくICU本」が少ないことを感じており今回の刊行に至りました』と記しましたように、当時はそのような状況だったのに比べて現在は集中治療に関する優れた医学書が多く出回っています。また専門性も高く世界基準を意識した書物も多くみられます。

そんな中で、本書の存在意義は何か？と自問自答してみました。答えは、これも初版の序に記しました通り、「若き集中治療医、ジュニア/シニアレジデントがICU管理をする上で最も身近な専門書」としての位置付けであると考えています。初期臨床研修医が集中治療室で仕事を始める際の入門書として、後期臨床研修医が広範な集中治療医学の各分野を整理する際に、さらには集中治療医学を専門にされていない先生方がICUでの管理を行う場合の手引書として、その他、多職種にわたるスタッフの皆さんが知識を確認する際の参考書、として活用いただける内容となっています。現場目線で日々の疑問や困ることを丁寧に取り上げ、実践において何らかのヒントを示せるように心がけました。また、広範な集中治療医学のテーマを厳選しつつも必須の事項は網羅し、かつ解説はあくまでコンパクトにまとめており、すぐに実践に役立つよう編集した点においても、タイトル通り「実践」にこだわりぬいた医学書であると自負しております。

今回の改訂は、急速に進歩を続ける集中治療医学を鑑みると少し遅かったくらいであるとの自戒もありますが、結果として、近年の集中治療医学の新しい考え方や注目される治療法などを盛り込むことができました。各項目の執筆は初版同様にベッドサイドに張り付いて今まさに臨床現場の一線で活躍されている先生方に“実践”重視の内容でお願いしました。現場でしか知りえないエッセンスが豊富にちりばめられていると思います。

近年多発している災害などの危機を乗り越えようとしている日本のキーワードの一つに「絆」という言葉があります。年を重ねたせいもあり、私にとってもこの「絆」という言葉が最も強く心の中にあり、非常に多くの皆様に支えられ頑張ることができているとひしひしと感じております。推薦の言葉をいただいた人生の師匠である三宅康史教授、坂本哲也教授、現職の多摩総合医療センターの近藤泰児病院長、ECMO診療でのご指導をいただいている竹田晋浩病院長（かわぐち心臓呼吸器病院）、市場晋吾教授（日本医科大学）、竹内一郎教授（横浜市立大学）、日々のサポートをいただいている杉田学教授（順天堂練馬病院）、岡田保誠部長（公立昭和病院）、森村尚登教授（東京大学）などをはじめ、枚挙するにはページ数が足りないほど多くの皆様に助けていただいております。ここに御礼申し上げます。

最後に、多忙ななか執筆をお引き受けくださった各先生方、初版時同様に多大なるご尽力をいただいた羊土社編集部の杉田真以子氏、スタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。

本書の初版発行時に非常に高い評価をいただいたこともあり、様々な学術集会やセミナーなどで若い先生方に「先生の本で勉強しています」「先生の本がきっかけで集中治療医になりました」などの声を多数かけていただきました。编者・著者冥利に尽きますし、本書を契機に多くの皆様との出会いをさせていただいたことに感謝しております。改訂版がまた、読者の方の何かしらの助けやきっかけになってくれれば幸甚です。

2019年2月

東京都立多摩総合医療センター 救命救急センター 部長/センター長  
多摩総合ECMOセンター チェアマン

清水 敬樹

# 初版の序

私がさいたま赤十字病院救命救急センターに赴任して10年を迎えます。その間、患者の重症度や施設全体の力量も上がり、近年では2台の人工呼吸器を用いての分離肺換気、ISSが20以上の重症外傷、広範囲熱傷、PCPSの導入・維持、血液浄化などの管理も至極平然と行われるようになりました。当施設で我々は救急専門医として三次救命対応を行いながら、初療に引き続いてICUへの入室患者に対して、主治医としてまたICU専門医として管理を行っています。その一方でICUの運営方法は術後ICUとして各科が主治医となる方式、その管理に麻酔科医や集中治療医が加わる方式、ICU入室患者は原則的に救急科や集中治療科が主治医となる方式など施設により多種多様です。さらに患者の集約化や多施設前向き研究の問題、集中治療医の専門性とはなど、我が国の集中治療医学も課題が山積みの現状です。

救命救急センターで年間50人のレジデントを教育している立場としては、ICUに関する専門書自体が非常に少なく、読みやすいICU本、面白いICU本、若手医師が「食いつくICU本」が少ないことを感じており今回の刊行に至りました。

本書は、連日ICUや一般病棟のベッドサイドに自らが張り付いて、奮闘している臨床家の先生方に執筆をお願いしております。日頃の経験や文献を踏まえて臨床に結びつく実践的な内容に加え、図、表、写真を多く組み込んで読みやすさにこだわりました。各先生方のバックグラウンドは集中治療科、救急科、麻酔科、循環器科、脳神経外科、外科など多岐に渡りますが、患者の病態改善への熱い志を持った仲間達です。呼吸、循環から始まりICUに入室してから患者を評価、管理していく順番に章立てを行い、近年その意義が重要視されつつある鎮静、鎮痛の新たな概念も網羅しています。その他、循環血液量の評価の一つである下大静脈径（IVC径）や外傷での関わりが深い腹部コンパートメント症候群（ACS）の項目などは100編近い論文、成書などを基に臨床にリンクさせました。

同じ病態でも患者の心機能、呼吸機能などで管理方法は微妙に異なります。本書を参考にした上で、より望ましい管理方法へと皆さんが味付けを加えていって下さい。ハンドブックとしてはページ数が増えてしまいましたが、非常に実践的で読みやすい内容と自負しています。

本書が若き集中治療医、ジュニア/シニアレジデントがICU管理をする上で最も身近な専門書の一つとして受け継がれていくことを願います。

また多忙の合間をぬって執筆をお引き受け頂いた各先生方、ならびに羊土社編集部の方、杉田真以子氏、スタッフの皆様に感謝を申し上げます。

2009年8月

さいたま赤十字病院救命救急センター  
清水 敬樹